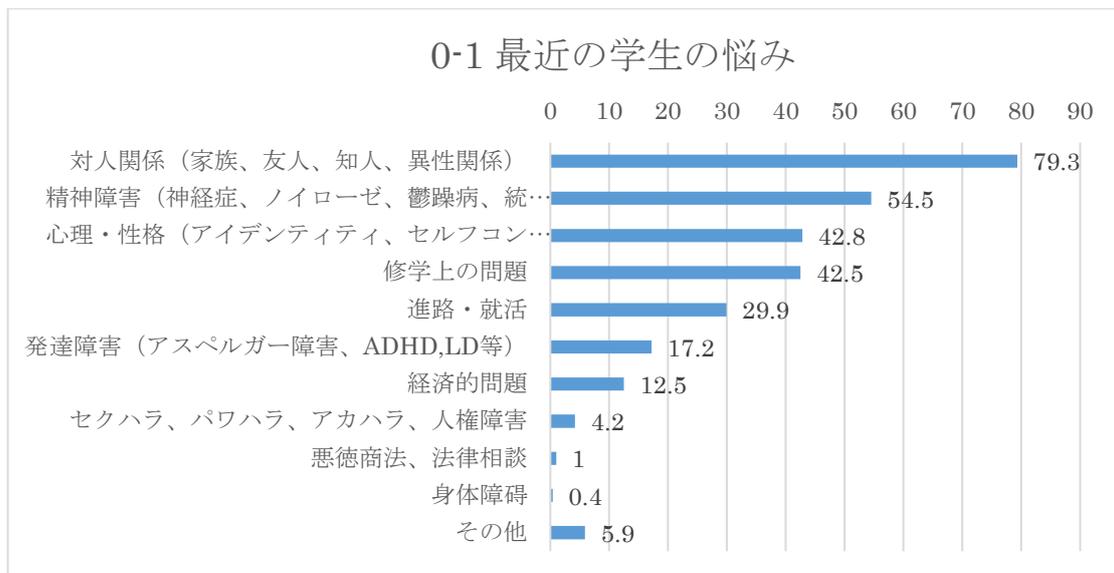


コミュニケーション能力・意識と演劇的要素

増広 凌雅 (情報学部メディア表現学科)

1. はじめに

近年、若者のコミュニケーション能力の低下が問題となっている。2002年文化庁が実施した「国語に関する世論調査」では、読む力、書く力、話す力、聞く力についてすべての世代の9割に迫る人々が、低下していると意識している。(文化庁 2002) また、グラフ0-1は大学における近年の学生の悩みを表したものであり、学生自身も対人関係について不安に思っていることが分かる。(文化庁 2011)



「挨拶ができない」「人付き合いが悪い」「返事ができない」コミュニケーション能力の低下は様々な弊害を孕んでおり、例えば、コミュニケーション能力の低下の中で起こっている事象の一つとして「会話のキャッチボール」ができないということがある。本来、コミュニケーション能力の高い人とは「人の話を聞き、話を理解できる人」、「自分の言葉で話ができる人」のことをいい、低い人とは「ひとりよがり自分の言葉ばかり伝えようとする人」、「借り物の言葉を並べたてる人」のことをいう。(児島 2008) 人の話を聞き自分の言葉で自分の考えを話す能力が低下した若者は、自分の思いを上手く相手に伝えられることができなかつたり、相手の真意を測りかねてしまう。現在日本の企業は、採用選考時に重視する要素の第一位がここ8年「コミュニケ

ーション能力」であるぐらい、コミュニケーション能力に重きを置いている。(ダイヤモンド 2011) そういった社会の現状も、今のコミュニケーション能力の低下を問題視させているのかもしれない。

コミュニケーション能力の低下の原因としては、ネットの普及による対人間のコミュニケーション頻度が減っていることが挙げられている。「インターネットがマス化していく中で、じつは「ことば」をかみ砕いて消化し、生活の場に定着させ、身に着ける力は、むしろ衰弱したと言ってもよい」(佐藤 2012) とあるように、日常生活における対人間での会話の語彙能力の低下や言葉を理解する力が衰弱している。また、「ケータイメールが生み出す「声をとまなわないことば」の空間においては他者の持つ制約力は明らかに遠ざけられておりその分だけ他者の存在感は希薄になっている。」(佐藤 2012) とあるように、対人間のコミュニケーションの場よりも自分の空間に入り込めるネットの環境により、自分以外の他者の存在感が希薄になっている。確かに、Twitter や Facebook といった SNS 上では活発に発言するのに、いざ対人となると発言が消極的になってしまうような人が私の友人にも多い。特に、小・中学生のころからこういったメディアが普及してきた私たちの世代は、インターネットメディアの影響を大きく受けている。そこで、こういった影響を受けてきた近年の子供たちのコミュニケーション能力の育成を図るために、平成 22 年 5 月、文部科学省は「コミュニケーション教育推進会議」を設置した。ここではこれからの日本の将来を担っていく今の子供たちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及の在り方について議論・活動を進めている。その内容の中の一つに「演劇を活用したコミュニケーション教育」である。本教育は小・中学校教育に演劇の授業を取り入れ、コミュニケーション能力の向上を図るものである。「コミュニケーション教育推進会議」座長の平田オリザ氏は、演劇を教育に取り入れることで生徒の居場所づくりができ、それが生徒たちの意欲を引き出すこともある。演劇を通して友達作りをさせ、コミュニケーションを学校で意識的に学ばせることが必要だと語っている。また、自己肯定感と自信の醸成も期待しているとしている。(内田洋行教育総合研究所 2012)

本当に、演劇がコミュニケーション能力の向上につながるのだろうか。私は自身が演劇に携わっていることもあり、この取り組みに大きな関心を抱いた。もし、演劇が本当にコミュニケーション能力の向上を助長するものであるならば、私たちのような演劇経験者はコミュニケーション能力が高いはずである。また、演じる、人と触れる、大勢の前で何かやり遂げるといったような演劇的要素を含むことを経験し、その経験により自己肯定ができている人たちにも同様なことが言えるのではないだろうか。本調査では、このように、「演劇経験者」と「演劇無非経験者」間のコミュニケーション能力又は意識の違いや、演劇的要素を含むことを経験してきた人のコミュニケーション能力又は意識を明らかにすることを目的としている。

2. 調査研究の方法

2-1: 進捗経緯

- 4月～5月 : 事前学習
- 6月～8月 : 調査テーマ決定・予備調査
- 9月～12月 : 報告書作成・調査実施
- 1月～2月 : 報告書作成

2-2: 調査概要

2-2-1: 調査の意図・仮説

・演劇経験者の方が演劇非経験者よりも対人コミュニケーションを得意としているのではないだろうか。

・演劇経験者の方が演劇非経験者よりも、自己肯定感が備わっているのではないだろうか。

・演劇的要素は対人コミュニケーション能力の形成に関係している。

・自己肯定感が備わっている人ほどコミュニケーション能力が高い。

2-2-2: 調査対象者と方法

調査場所

文教大学湘南キャンパスで開講されている

「英語オーラル・コミュニケーション論」

「英語とメディア」

以上2つの講義

文教大学湘南キャンパス演劇部劇団また旅

塩沢ゼミナール

以上2つの団体

なお、今回、以上の授業・団体に調査をした理由としては、演劇経験者と非経験者のサンプルをある程度バランスをとるためである。

回答数

配布数:150枚 回収数:150枚 有効回答数:133枚 有効割合:88.7%

調査方法

質問紙による自記式のアンケートを行い、授業内又は団体内で集合調査を行った。

質問項目

問 1：演劇経験の有無

問 2～問 3：演劇経験者への演劇経験期間と好きなジャンルを問うもの

問 4～問 7：演劇非経験者への演劇的経験の有無を問うもの

問 8～問 14：回答者全員の日常生活における演劇的要素の有無を問うもの

※演劇的要素とは、演劇をするうえで必要になる「体の動き・表情・人前に立つこと・人の話を聞くこと」といった行動と定義する

問 15：回答者全員の初対面の人や公衆の面前でのコミュニケーションに対する意識を問う。段階評定で答えてもらい「1」が一番当てはまり、「5」が一番当てはまらないというようなもの

問 16：回答者全員の友人関係間でのコミュニケーションに対する意識を問う。段階評定で答えてもらい「1」が一番当てはまり、「5」が一番当てはまらないというようなもの

問 18：回答者全員のコミュニケーション能力について問う。段階評定で答えてもらい「1」が一番当てはまり、「5」が一番当てはまらないというようなもの

問 19・問 20：回答者全員のコミュニケーション能力が高い人はどのような人かの考えを問う。段階評定で答えてもらい「1」が一番当てはまり、「5」が一番当てはまらないというようなもの。
問 20 は自由記述。

なお、今回の調査で自己肯定感を測定する項目は問 15 と問 16 であり、「当てはまる」と答えた人ほど自己肯定感が強く、「当てはまらない」と答えた人ほど自己肯定感が弱いとする。

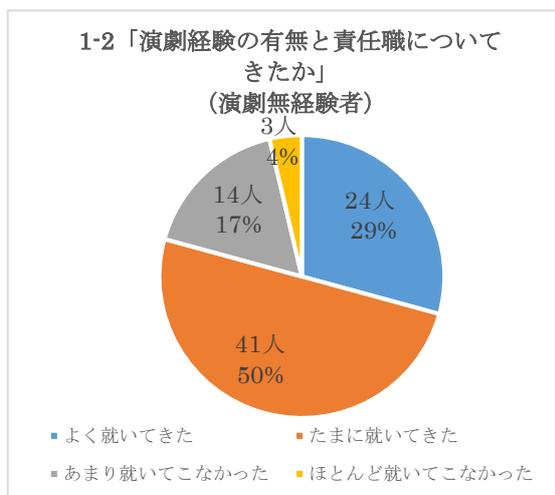
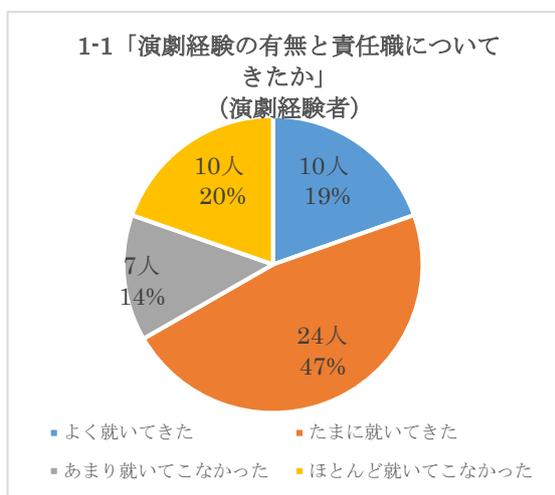
3. 調査研究の結果

回答者の内訳として、「演劇経験者」が 38.3%、「演劇無経験者」が 61.7%となっている。また、「演劇経験者」で演劇を経験した期間は「半年以下」が 33.3%、「半年から 1 年」が 31.4%、「1 年～2 年」が 2%、「2 年～3 年」が 9.8%、「3 年～4 年」が 7.8%、「それ以上」が 15.6%であった。好きな演劇のジャンルは「コメディ」が 49.1%、「シリアス」が 3.9%、「ファンタジー」が 25.4%、「ホラー」が 1.9%、「ブラックコメディ」が 7.8%、「青春もの」が 3.9%、「時代もの」が 5.8%、その他が 1.9%であった。この演劇を経験した期間と好きな演劇のジャンルは今後のコミュニケーション能力に関する質問において、分析するにはサンプル数が少なく、有意な差が見られなかったため以後記述しないこととする。

1 演劇経験の有無による自己肯定感の違い

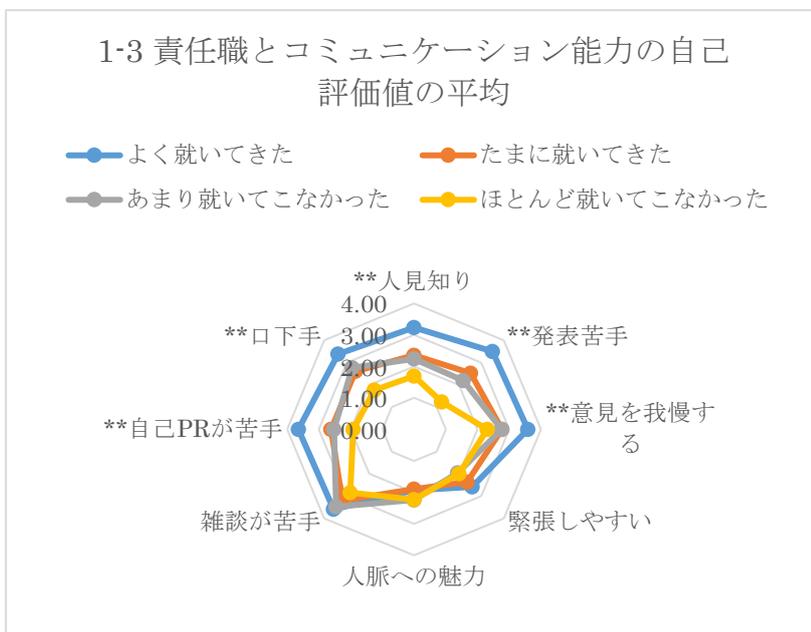
まず初めに、演劇経験者と非経験者の間で日常生活において何気なく行われている演劇的要素が、自身の自己肯定感と関連しているかどうかを検討する。ここで言う、演劇的要素を問う質問項目は問 9「あなたは普段の会話でリアクションが大きい方ですか。」問 10「あなたは人と身振り手振りを交えて会話しますか」問 11「あなたはこれまで代表やまとめ役といった責任職に就いたことがありますか。」問 12「あなたは友人関係の中で、仲裁役になることが多いですか。」問 13「あなたは年上年下関係なく食事や外食をすることが多いですか。」問 14「あなたは自分自身が表情豊かだと思いますか。」の六つで、この中で有意に差が見られたのは問 11の「あなたはこれまでに代表やまとめ役といった責任職に就いたことがありますか。」という設問であった。(t=2.299,df=86.756,P<.05)

グラフ 1-1 とグラフ 1-2 はこの設問の結果を円グラフで示したものである。演劇経験者は「よく就いていた」「たまに就いてきた」が全体の 56%を占めているのに対し、非経験者は全体の 79%も占めている。また、経験者は「ほとんど就いてこなかった」と回答した人が 20%も占めている。よって、演劇経験者よりも演劇非経験者の方が責任職についてきた傾向があると言える。



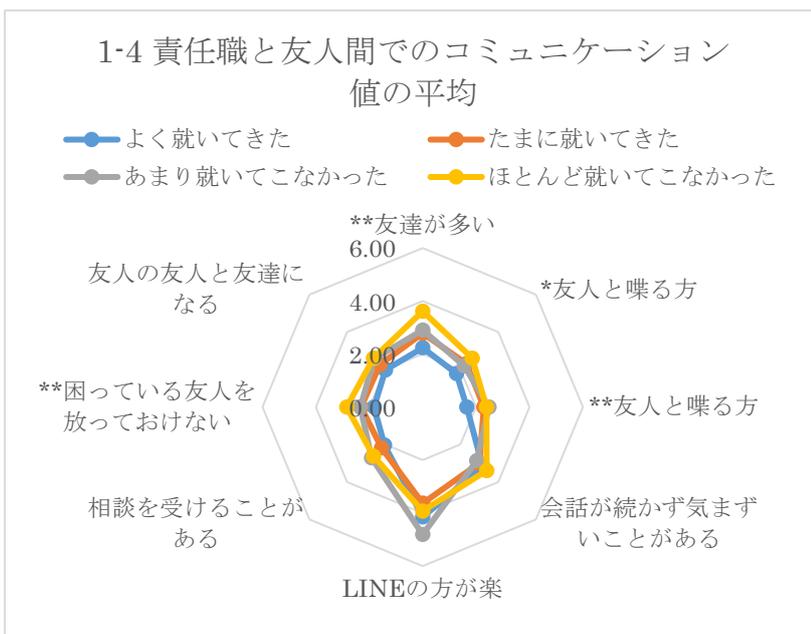
そしてさらに、責任職についてきたことがコミュニケーション能力に関わっているのか分析してみた。

以下の図 1-3 から図 1-5 は責任職と初対面や公衆の面前でのコミュニケーションに対する意識、友人間でのコミュニケーションに対する意識、自身のコミュニケーション能力について問う設問の集計結果を表している。これらの設問は回答者に段階評定で答えてもらい「1」が一番当てはまり、「5」が一番当てはまらない



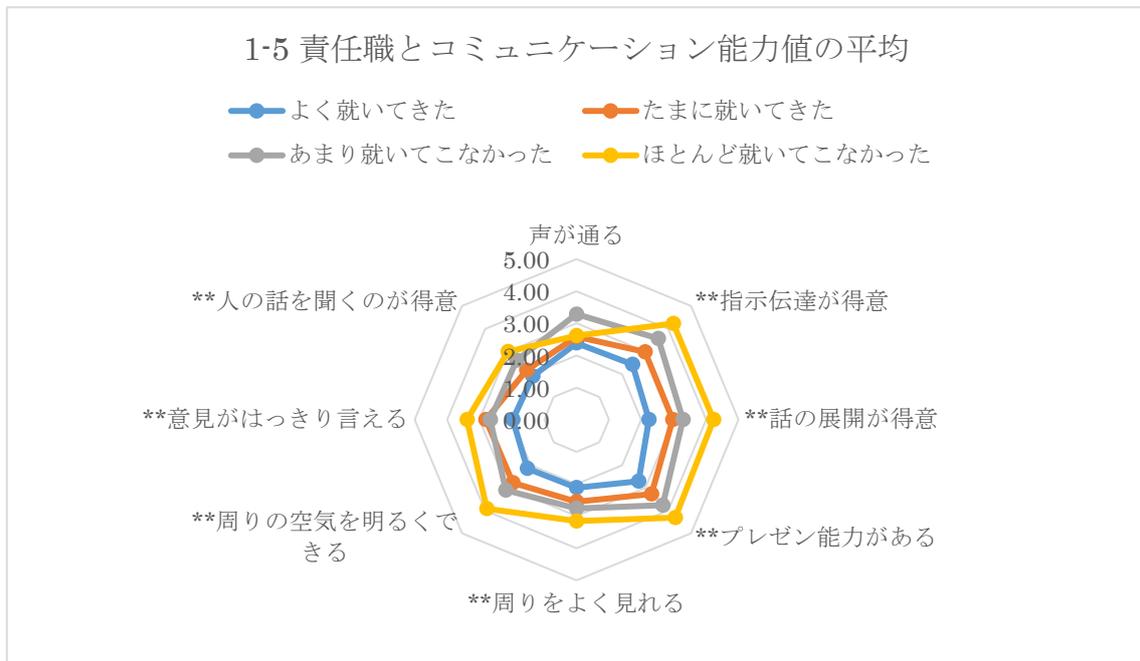
いというようなものだった。グラフ 1-3 から 1-5 はこれらの結果の平均を表したものである。グラフ 1-3 を見ると自分のことを人見知りだと思っている (F=6.272,df=132,p<.01)「発表が苦手だ」(F=13.932,df=132,p<.01)「自分は意見を我慢する方だ」(F=4.730,df=132,p<.01)「自己 PR が苦手だ」(F=10.060,df=132,p<.01)「自分は口下手だ」(F=6.760,df=132,p<.01) と思っている人は責任職に「あまり就いてこなかった人」とほとんど「就いてこなかった人」が多いことが分かる。逆に、責任職によく就いてきたと答えた人はこれらの質問に高い数値で答えた人が多いことも分かる。

また、友人間のコミュニケーションにおいてグラフ 1-4 を見ると責任職によく就いてきた人とたまに就いてきた人は「自分は友達が多い方だ」(F=5.258,df=132,p<.01)「友人と話すとき口数が多い方だ」(F=2.672,df=132,p<.05)「友人と話すとき冗談を言う方だ」(F=4.328,df=132,P<.01)「困っている友人を放っ



ておけない」(F=3.772,df=132,P<.01)の四つの項目で有意な差が見られた。

さらに、コミュニケーション能力の高さにおいてグラフ 1-5 を見ると「自分は指示伝達が得意だ」(F=11.050,df=132,p<.01)「話を展開することが得意だ」(F=16.880,df=132,p<.01)「自分はプレゼンテーション能力がある」(F=8.955,df=132,p<.01)「自分は周りを良く見える」(F=3.765,df=132,p<.05)「自分は周りの空気を良くすることができる」(F=10.652,df=132,p<.01)「自分の意見がはっきり言える」(F=6.350,df=132,p<.01)「自分は人の話を聞くのが得意だ」(F=4.414,df=132,p<.01)の七つの項目で有意な差が見られた。以上の結果から、責任職に就いてきた人と就いてこなかった人とではコミュニケーション能力に対する意識には差があることが分かる。前者の方がコミュニケーションに対してプラス志向であり、後者はマイナス思考な一面を持っていると言える。



II 演劇経験の有無によるコミュニケーション能力の違い

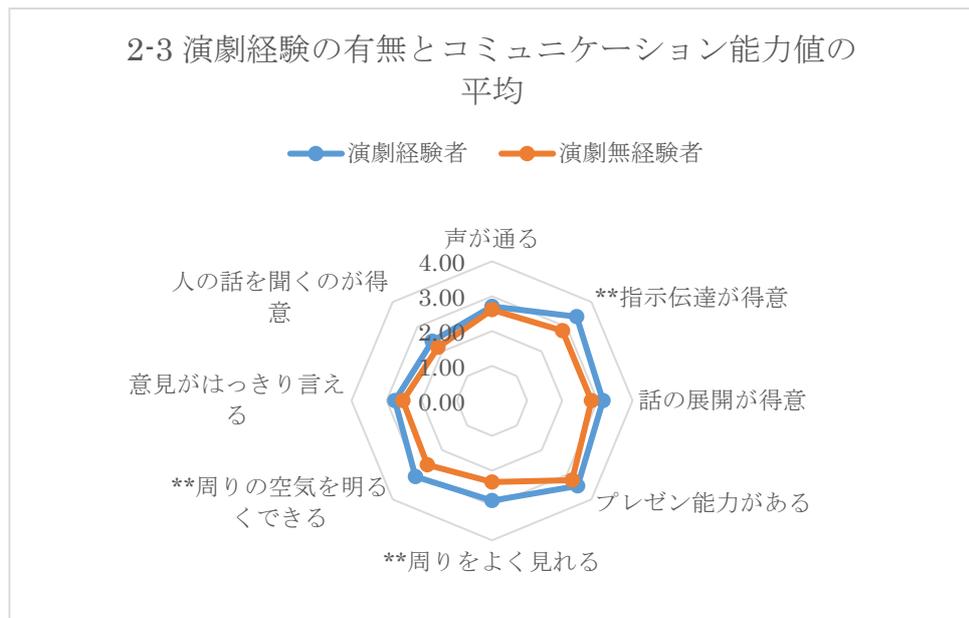
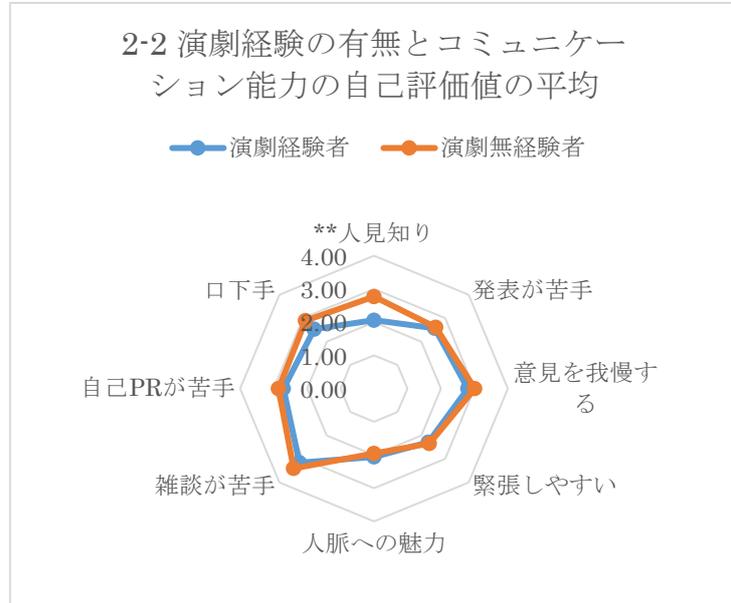
ここでは演劇経験者と非経験者間でコミュニケーション能力にどのような差があったのか分析していく。グラフ 2-2 は演劇経験の有無とコミュニケーション能力の自己評価の平均値を表したものである。グラフを見ると、「人見知り」の項目で有意な差が見られることが分かる。

($t=3.314, df=112.694, P<.01$) この結果から、演劇経験者の方が自分のことを人見知りだと考えている傾向があると言える。

次に、演劇経験者と非経験者間でコミュニケーション能力にどのような差があったのか分析していく。グラフ 2-3 は演劇経験の有無とコミュニケーション

能力の平均値を表したものである。有意な差が見られたのは、問 18-2 の「自分は人に指示伝達するのが得意だ」 ($t=2.813, df=131, P<0.1$)と、問 18-5 の「自分は周りをよく見ている」 ($t=2.892, df=131, P<.01$)。問 18-6 「自分は周りの空気を明るくすることができる」の三つであった。 ($t=2.46, df=131, P<.01$) 問 18-2 から、演劇経験者の方が人に指示伝達をするのが苦手だと考えている傾向があることが分かる。問 18-5 からは演劇経験者の方が自分は周りを見ることができていな

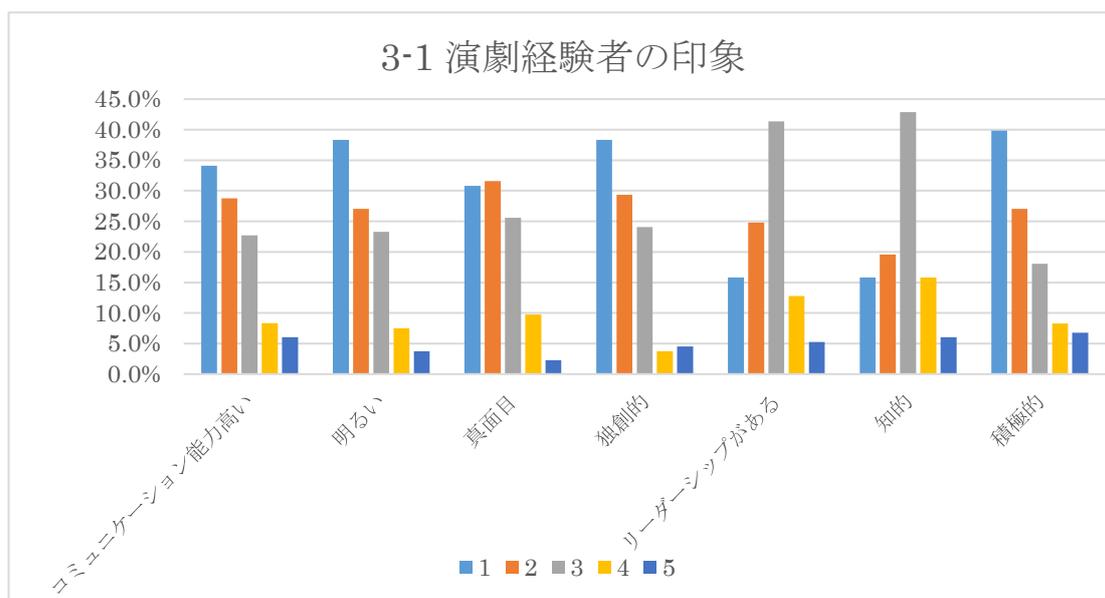
いと考えている傾向があることが分かる。問 18-6 からは演劇経験者よりも無経験者の方が周りの空気を良くすることに自信があることが分かる。



Ⅲ 演劇経験者の印象とコミュニケーション能力の高い人

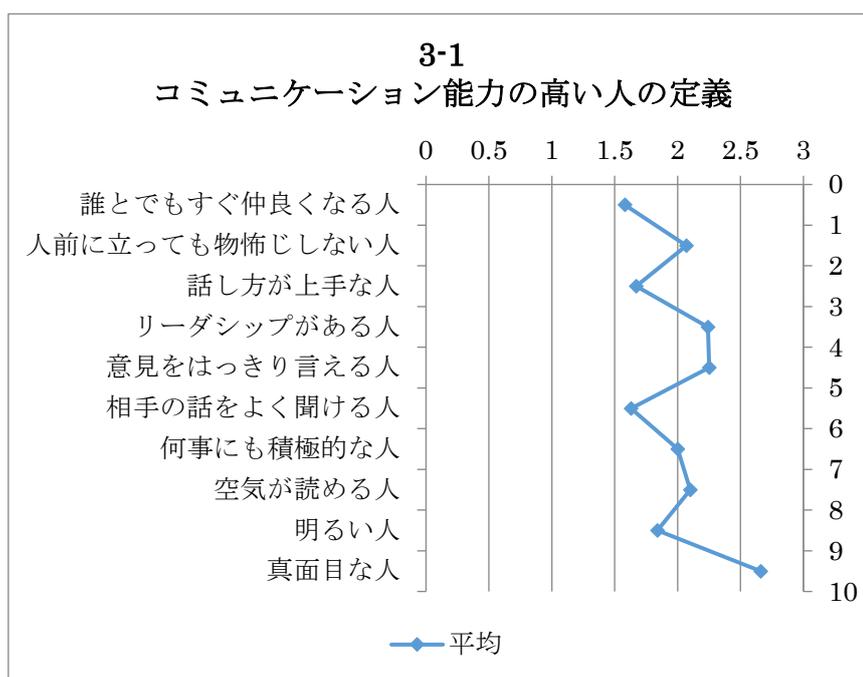
ここでは、回答者が演劇経験者にどのような印象を持っているのか、また、どのような人がコミュニケーション能力の高い人だと思っているのかを分析していく。

まず、回答者全体の回答結果を分析する。グラフ 3-1 は回答者全体が演劇経験者に対してどのような印象を持っているかを表したものである。グラフを見ると「リーダーシップがある」「知的」の二項目以外はどれも「当てはまる」「やや当てはまる」を選択している人が多いことが分かる。全体的に見ると、演劇経験者の印象は良いと言えるだろう。これは演劇経験者も非経験者もグラフ 2-1 と似たような結果となった。



次に「あなたが考えるコミュニケーション能力が高い人とはどういう人を指しますか。という質問について分析していく。

グラフ 3-1 は問 19 の全体の結果を集計し表したものである。グラフを見ると「誰とでも仲良くなる人」「話し方が上手な人」「相手の話をよく聞ける人」の三つの項目に「当てはまる」の回答が多いことが分かる。なお、この結果は演劇経験の有



無、演劇的要素の有無間で有意な差は得られず。回答者全体がこのような考えを持っている傾向があると分かった。

・ 本章の総括 ・

本章では、演劇経験の有無が対人コミュニケーションにどのように関わっていたのかを分析してきた。問 11 の「責任職に就いてきたか」という質問項目から、演劇非経験者の方が演劇経験者よりも責任職に就いてきていたことが分かった。また、責任者の経験頻度はコミュニケーション能力の形成・自己肯定感の形成に関係していることが分析から分かった。さらに、演劇経験者の有無とコミュニケーション能力に関する分析を行ったところ、一部の項目で、有意な差が見受けられ、演劇非経験者より演劇経験者の方がコミュニケーション能力・自己評価・自己肯定感が低いように見えた。

また、回答者が考える演劇経験者の印象とコミュニケーション能力の高い人の定義を分析してきた。演劇経験者は演劇経験者非経験者関係なく良い印象を持たれている。「誰とでもすぐ仲良くなる人」「話し方が上手な人」「人の話をよく聞ける人」など、対人での会話能力に優れている人をコミュニケーション能力が高いとしているようだ。

IV 演劇的要素の回答結果

ここでは日常生活において行われている演劇的要素がコミュニケーション能力に関わっているのかを分析していく。まず、「演劇非経験者」に関する質問分岐の結果である。演劇への興味度は「興味ある」と答えた人が 12.1%、「少し興味ある」が 36.6%、「あまり興味ない」が 30.5%、「全く興味ない」が 20.7%であった。「少し興味がある」、「全く興味がない」に回答が集中した形となった。演劇非経験者の中で人前での発表を経験した回数は「たくさんある」と答えた人が 29.3%、「少しある」が 52.4%、「あまりない」が 11.0%、「全くない」が 7.3%といった結果になった。なお、経験回数の多い少ないは回答者自身の感覚に委ねた。人が人によって態度を変えることについてどう思うかという質問に関しては、「当然だと思う」と答えた人が 20.7%、「仕方ないことだと思う」が 48.8%、「わからない」が 7.3%、「あまりいい気持ちがない」が 18.3%、「よくないことだと思う」が 4.9%という結果になった。共通項目の性別の内訳は「男性」が 37.6%、「女性」が 62.4%であった。

V 演劇的要素の有無による自己肯定感の違い

問 6 の人前での発表頻度について分析していく。人前での発表頻度の回答結果を「たくさんある」「少しある」と答えた人を「ある人」、「あまりない」「全くない」と答えた人を「ない人」と再割り当てし、T 検定を行ったところ有意な差が見られた。(t=2.2431,df=16.371,p<.05) 結果、人前での発表が多い人ほど、身振り手振りが多いことがわかった。

そこで、身振り手振りが多いことがコミュニケーション能力に影響しているのかを分析した。以下は、「身振り手振り」に関する分析結果を記述していく。ここでは身振り手振りを「よくする」「たまにする」と答えた人を「する人」、「あまりしない」「全くしない」と答えた人を「しない人」、

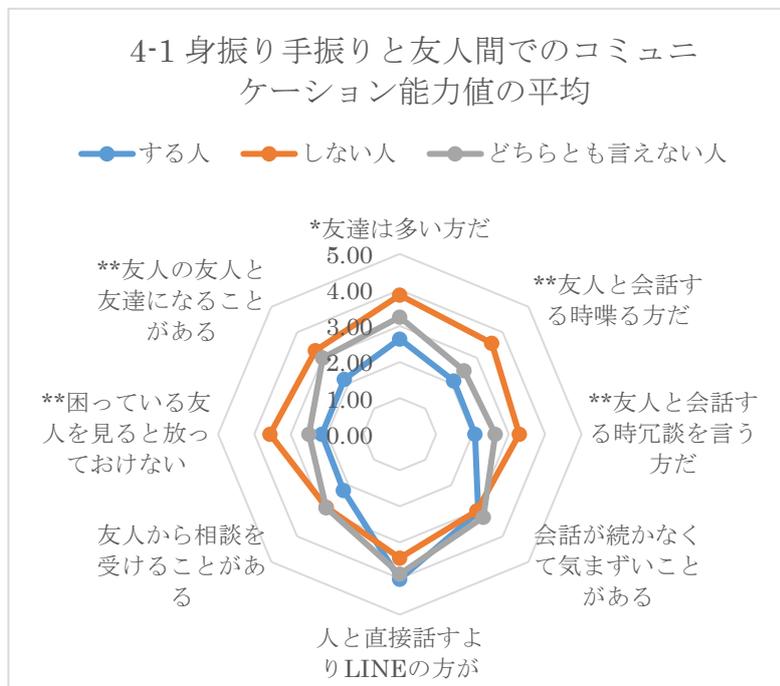
「どちらともいえない」と答えた人はそのまま「どちらとも言えない人」と三つに再分配し、分散分析を行った。グラフ4-1は身振り手振りと友人間でのコミュニケーション値の平均の表したものである。中でも有意な差が見られたのは「友達が多い方だ」

($F=4.676, df=132, p<.05$)

「友人と会話するとき喋る方だ」

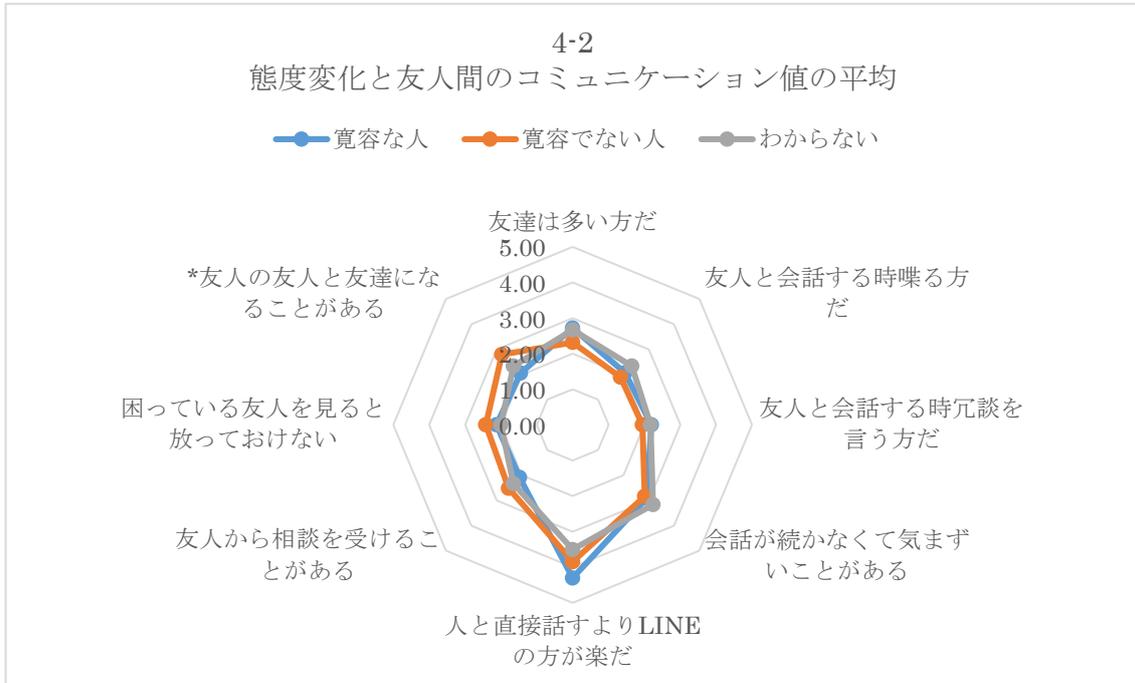
($F=7.295, df=132, p<.01$) 「友

人と会話する時冗談を言う方か」($F=5.856, df=132, p<.01$) 「困っている人を見ると放っておけない」($F=7.342, df=132, p<.01$) 「友人の友人と仲良くなることもある」($F=5.005, df=132, p<.01$) の五項目だった。

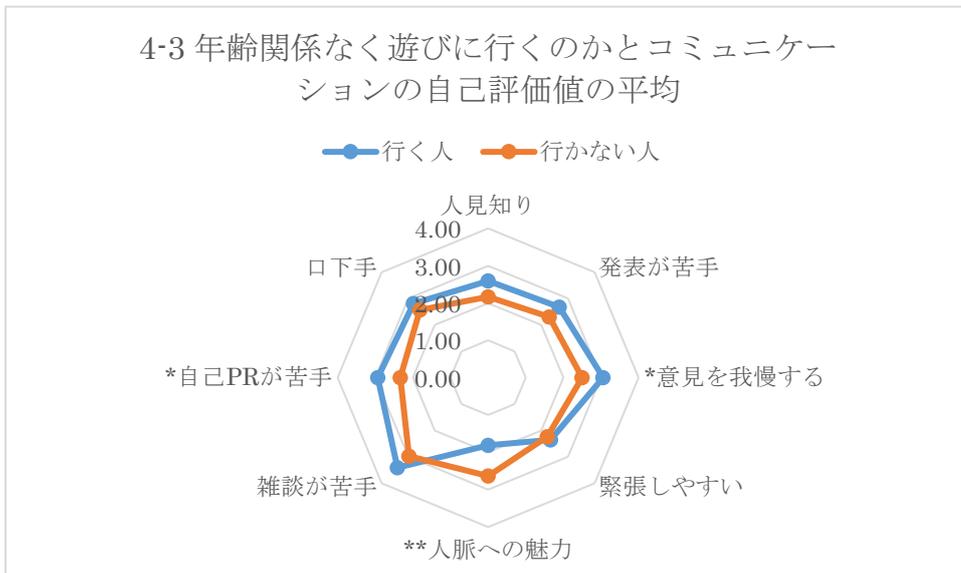


次に問7の「人が人によって態度を変えることについてどう思うか」という質問項目について分析していく。態度変化の回答結果を「当然だと思う」「仕方がない事だと思う」と答えた人を「寛容な人」、「あまりいい気持ちがしない」「よくないことだと思う」と答えた人を「寛容でない人」、「わからない」と答えた人を「わからない」と再割り当てし、分散分析を行ったところ有意な差が見られた。(F=6.978,df=81,p<.01) よって、態度変化に対して寛容な考えを持っている人ほど、年齢関係なく友人と遊びに行っている傾向があることが分かった。

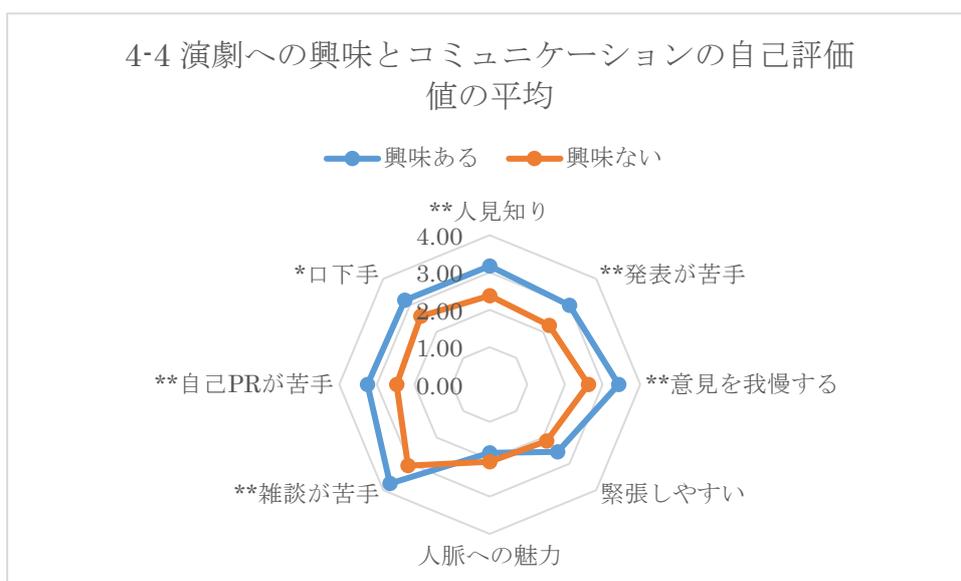
同じく「態度変化」について有意な差が見られたのは友人間でのコミュニケーションであった。グラフは態度変化と友人間でのコミュニケーションの結果の平均をグラフにしたものである。グラフ 4-2 を見ると「友人の友人と友達になることがある」の項目に置いて「よくないことだと思う」と回答した人が高い値を回答しており、態度変化に寛容な人ほど友人の友人と仲良くなることが多いことが分かった。(F=3.523,df=81,P<.05)



また、態度変化対して寛容な考えを持っている人ほど、年齢関係なく友人と遊びに行っているという結果を受けて、年齢関係なく友人と遊びに行っていることがコミュニケーション能力に影響しているかどうかを分析するために「よくする」「たまにする」と答えた人を遊びに「行く人」「あまりしない」「ほとんどしない」と答えた人を遊びに「行かない人」と再分配し T 検定を行った。



グラフ 4-3 は年齢関係なく友人と遊びに行くのかとコミュニケーションの自己評価の平均の結果を表したものである。グラフを見ると「行く人」の方が「行かない人」よりも当てはまらな
いと考えていることが分かる。特に「意見を我慢する」(t=2.1,df=131,p<.05)「自己 PR が苦手
か」(t=2.376,df=131,P<.05) の二つの質問項目で正の有意な差が見られた。しかし、「人脈への
魅力」(t=3.450,df=131,p<.01) は負の有意な差が見られた。よって、年齢関係なく遊ぶ機会が
多い人の方が自身のコミュニケーション能力に自信を持っていると言える。また、年齢関係なく
遊びに行く人のほうが、人脈が広がることへの魅力も感じているようだ。

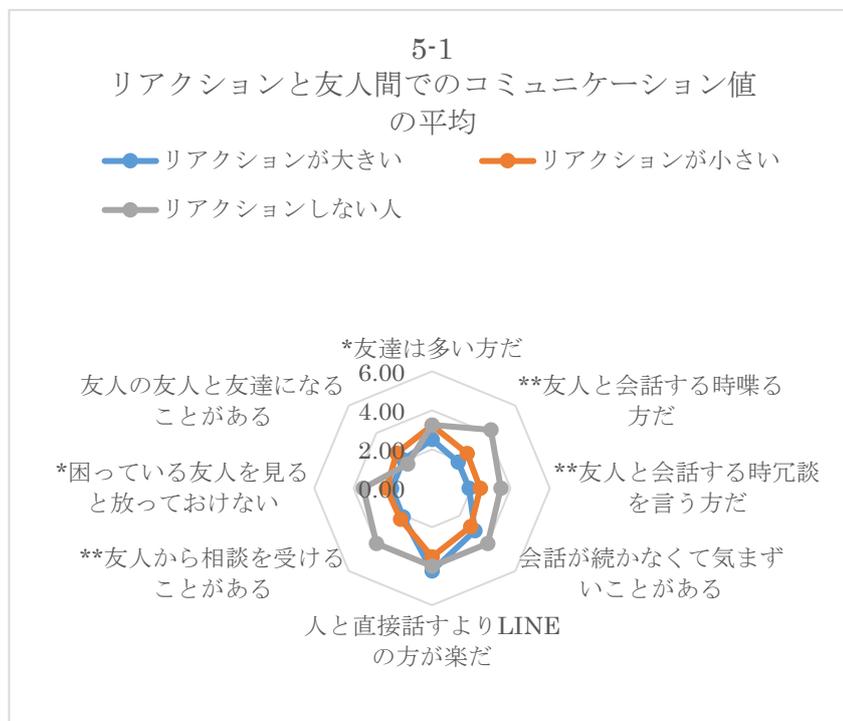


次に、問 4
について、演
劇へ興味を
持っている
かないか
で、コミュニ
ケーション
能力に差が
出るかを分
析していく。
演劇に「興

味ある」「少し興味ある」と答えた人を「興味ある」、「あまり興味ない」「興味ない」と答えた人
を「興味ない」と再分配し T 検定を行った結果、有意な差が得られた。グラフ 4-4 は演劇への興
味とコミュニケーション能力の自己評価の平均値を表したものである。有意な差が見られたのは
「人見知りかどうか」(t=2.823,df=80,p<.01)「発表が苦手かどうか」(t=2.820,df=80,p<.01)「意
見を我慢する方かどうか」(t=2.934,df=80,p<.01)「雑談が苦手」(t=2.716,df=80,p<.01)「自己 PR
が苦手かどうか」(t=2.934,df=80,p<.01)「口下手かどうか」(t=2.418,df=80,p<.05)の質問項目で、
演劇に興味がある人の方がコミュニケーション能力の自己評価が高い傾向があると分かる。

次に問 8~問 14 の演劇的要素について問う質問項目について分析していく。なお、ここまで
で、問 10 の「あなたは人と身振り手振りを交えて話しますか」と問 11 の「あなたはこれまで
代表やまとめ役といった責任職に就いたことがありますか」、問 13 の「あなたは年上年下関係
なく食事や外出をすることが多いですか」の三つの質問項目の分析は終えているので、本章では
取り扱わないこととする。

まず、問9の「あなたは普段の会話でリアクションが大きい方ですか」という質問についてだが、「大きいほうだと思う」「どちらかと言えば大きい」と答えた人を「リアクションが大きい」、「どちらかと言えば小さい」「小さいほうだと思う」と答えた人を「リアクションが小さい」、「リアクションはしない」と答えた人を「リアクションしない」の三つに再分配し、友人間でのコミュニケーションについて分散分析を行ったところ有意な差が得られた。グラフ5-1はリアクションと友人間でのコミュニケーション値の平均を表したものである。グラフを見ると「友達が多い方だ」

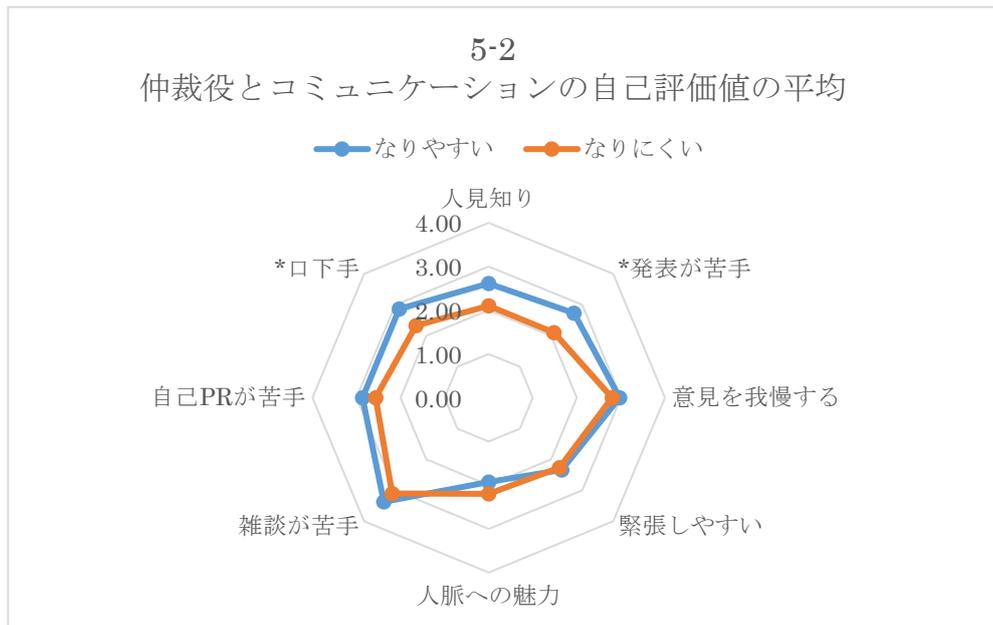


($F=4.639, df=106, p<.05$) 「友人と会話する時喋る方だ」 ($F=15.154, df=106, p<.01$) 「友人と会話する時冗談を言う方だ」 ($F=8.242, df=106, p<.01$) 「友人から相談を受けることがある」 ($F=7.059, df=106, p<.01$)

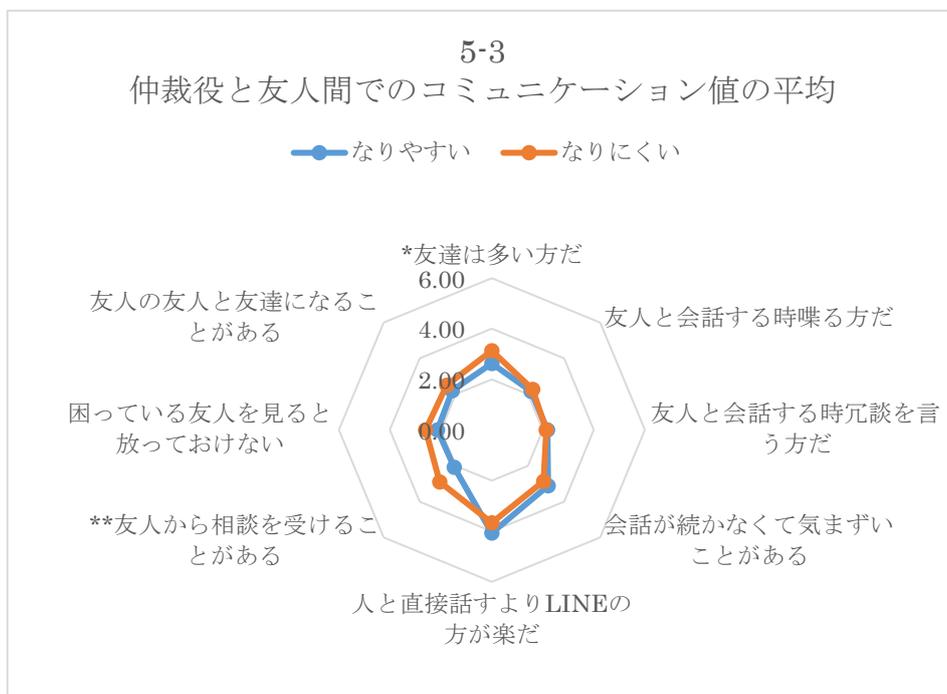
「困っている友人を見ると放っておけない」 ($F=4.549, df=106, p<.05$) の項目に有意な差が表れていることが分かる。リアクションの大きい人のほうが、友人間のこれらの質問項目に当てはまると考え、リアクションしない人のほうが当てはまらないと考えていることが分かった。

次に、問12の「あなたは友人間の中で、仲裁役になることが多いですか」という質問項目だが、「よくなる」「たまになる」と答えた人を「なりやすい」、「あまりならない」「ほとんどならない」と答えた人を「なりにくい」の二つに再分配し、他の質問項目との関連を調べるためT検定を行ったところいくつかの項目との間に有意な差が表れた。

まず、コミュニケーションの能力の自己評価との関連についてである。グラフ5-2は仲裁役とコミュニケーション能力の自己評価値の結果の平均を表したものである。「発表が苦手」 ($t=2.380, df=131, p<.05$) 「口下手」 ($t=2.141, df=131, p<.05$) の二つの項目で有意な差が見られた。グラフを見ると、仲裁役に「なりやすい」人の方がこれらの項目に当てはまらない、「なりにくい」人のほうが「当てはまる」と考えていることがわかる。

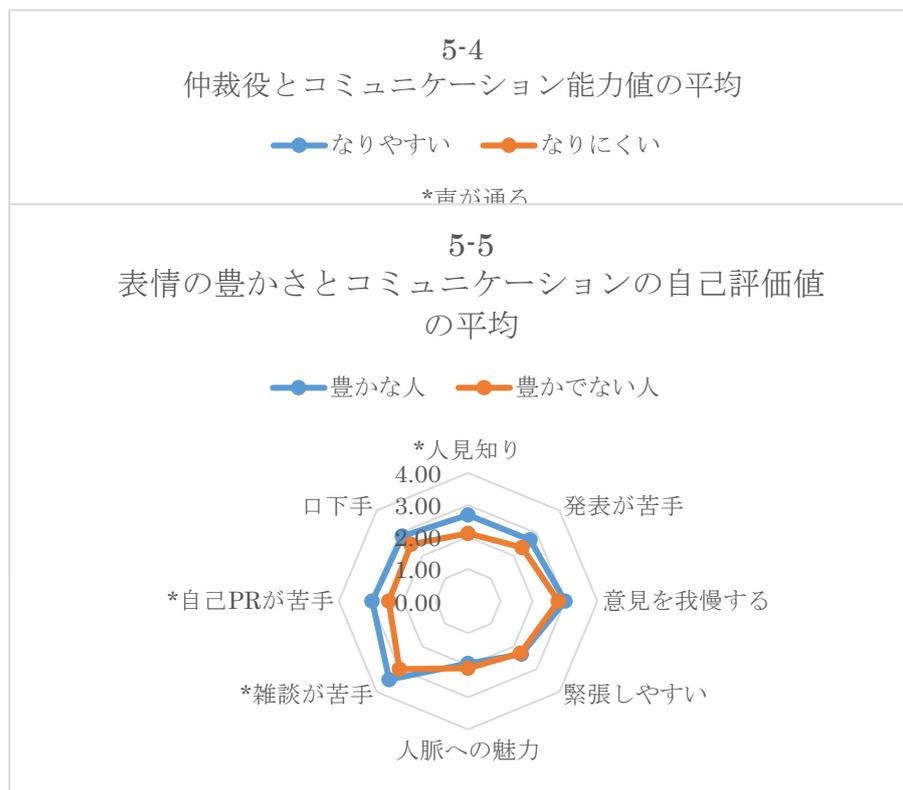


次に、友人間でのコミュニケーションとの関連について分析していく。グラフ 5-3 は仲裁役と友人間コミュニケーション値の結果の平均を表したものである。グラフを見ると「友達が多い方だ」($t=2.116, df=131, p<.05$)「相談を受けることがある」($t=3.724, df=131, p<.01$)の二つに関して有意な差が見られ、「なりやすい」人はこれらの項目にあてはまり、「なりにくい」人はこれらの項目にあてはまらないと考えていることがわかる。



次は、コミュニケーション能力値との関連について分析していく。グラフ 5-4 は仲裁役とコミュニケーション能力値の結果の平均を表したものである。「声を通る」(t=2.232,df=131,p<.05)「指示伝達が得意」(t=2.015,df=131,p<.05)「話の展開が得意」「周りをよく見られる」(t=2.589,df=131,p<.05)「周りの空気を明るくできる」(t=2.768,df=131,p<.01)「人の話を聞くのが得意」(t=2.164,df=131,p<.05)の四つの項目で有意な差が見られた。グラフを見ると「なりやすい」人ほど「あてはまる」、「なりにくい」と人ほど「あてはまらない」と考えていることが分かる。

問 14 の「あなたは自分自身が表情豊かだと思いますか。」という質問項目だが、表情が豊かだと「思う」「少し思う」と答えた人を「豊かな人」、「あまり思わない」「思わない」と答えた人を「豊かでない人」の二つに再分配し、他の質問項目との関連を調べるため T 検定を



行ったところいくつかの項目との間に有意な差が表れた。

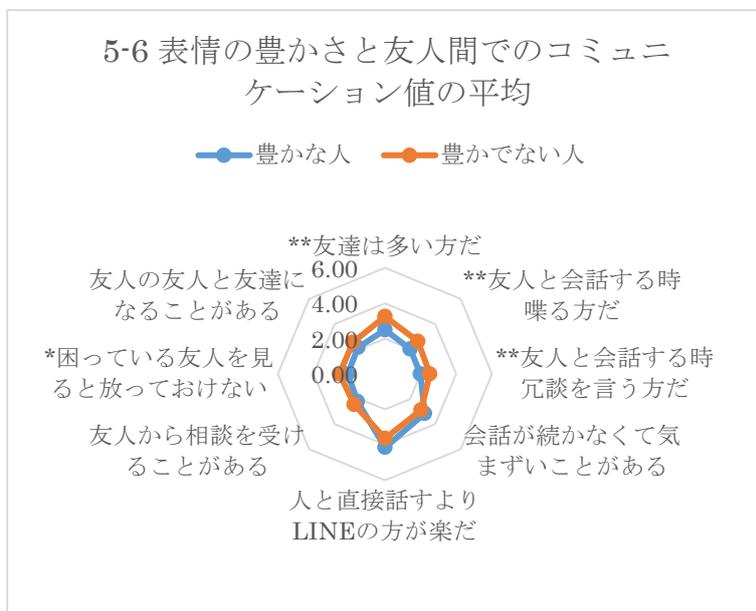
まず、コミュニケーションの自己評価について分析していく。グラフ 5-5 は表情の豊かさとコミュニケーションの自己評価値の平均を表したものである。「人見知り」(t=2.375,df=131,p<.05)「雑談が苦手」(t=2.156,df=131,p<.05)「自己 PR が苦手」(t=2.283,df=131,p<.05)の三つに有意な差が見られた。このことから、表情が豊かな人ほどこれらの項目に当てはまらない、豊かでない人ほど当てはまると考えていることが分かる。

次に、友人間コミュニケーションとの関連を分析していく。グラフ 5-5 は表情の豊かさと友人間値の結果の平均を表したものである。「友達が多い」(t=3.704,df=131,p<.01)「友人と会話するとき喋るほうだ」

(t=3.287,df=131,p<.01)「友人と会話する時冗談を言う方」

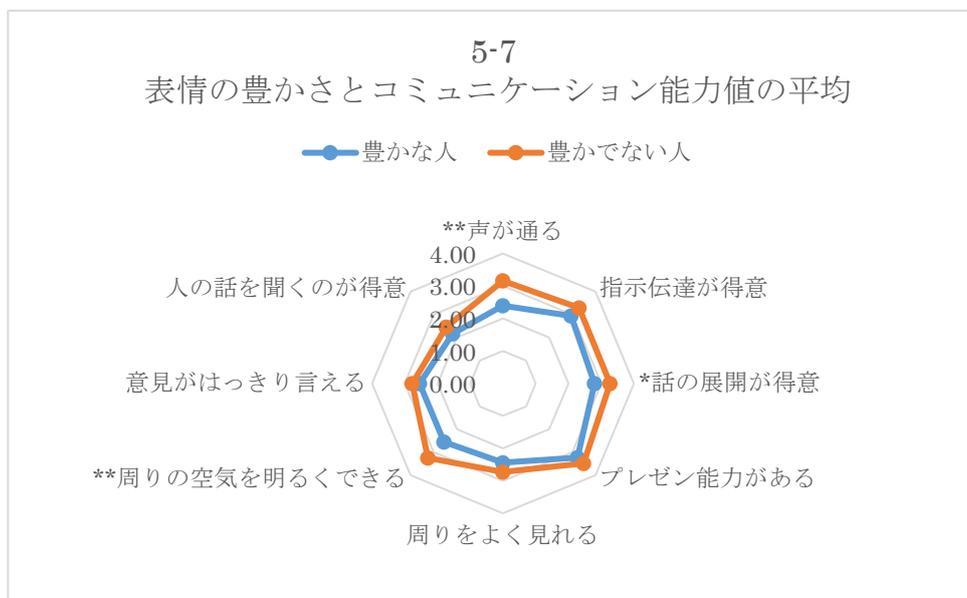
(t=2.87,df=131,p<.05)「困っている友人を見ると放っておけない」

(t=2.461,df=131,p<.05) の四つの項目で有意な差が得られた。グラフを見ると、表情が豊かな人ほどこれらの項目に当てはまる、豊かでない人ほど当てはまらないと考えていることが分かる。



次に、コミュニケーション

能力値との関連について分析していく。グラフ 5-7 は表情の豊かさとコミュニケーション能力値の結果の平均を表したものである。「声を通る」(t=3.115,df=131,p<.01)「話の展開が得意」(t=2.501,df=131,p<.05)「周りの空気を明るくできる」(t=3.544,df=131,p<.01) の三つの項目で有意な差が得られた。グラフを見ると、表情が豊かな人ほどこれらの項目に当てはまる、表情が豊かでない人ほど当てはまらないと考えていることが分かる。



・本章の総括・

この章では演劇的要素を含むこととコミュニケーション能力に関わりがあるのかを検証してきた。

まず、人前での発表経験が多い人ほど日常生活において身振り手振りを交える会話が多いことが分かった。しかし、この「身振り手振りを交えて会話をする」という行為は、「友人間で会話する時に冗談を言う方だ」という質問項目に正の影響を及ぼしていたものの、コミュニケーション能力自体にはあまり影響は及ぼしていないようだ。

また、人が人によって態度を変えることに寛容な人ほど、友人の友人と友達になることが多いことが分かった。さらに、寛容な人ほど年齢関係なく友人と遊びに行っていることが分かった。年齢関係なく友人と遊びに行っている人の方が、自身のコミュニケーション能力に自信を持っていることも判明した。

演劇に興味を持っている人ほどコミュニケーション能力の自己評価が高く自己肯定感が強いことも分かった。

問9ではリアクションを多くとる人の方が友人間でのコミュニケーション能力において有意な差が見られリアクションを取る人の方が友人間でのコミュニケーションに自信がある傾向があることが分かった。また、問12ではコミュニケーション能力意識値・友人間コミュニケーション値・コミュニケーション能力値のいくつかの項目で有意な差が見られ、仲介役になることが多い人ほどそれらの項目にポジティブな考えを持っていることが分かった。さらに問14では友人間コミュニケーション値・コミュニケーション能力値のいくつかの項目で有意な差が見られ、表情が豊かな人ほどそれらの項目にポジティブな考えを持っていることが分かった。以上の結果から演劇的要素は対人コミュニケーション能力の形成に関わっていると言えるのではないだろうか。

これらのことから、自己肯定感が備わっている人ほど、コミュニケーション能力も高いという仮説が成立したといえる。

4. まとめと今後の課題

本調査は演劇経験の有無または演劇的要素経験の頻度がコミュニケーション能力やコミュニケーション能力に対する意識に影響を与えるのかを検討してきた。その中で演劇経験者は演劇無経験者から「コミュニケーション能力が高い」や「明るい」という印象を受けていることが分かった。しかし一方で、演劇経験者たちは自分のことを「人見知りだ」などと考えおり、コミュニケーションに対する意識が低かった。このことから、仮説の「演劇経験者の方が演劇無経験者よりも対人コミュニケーションを得意としているのではないだろうか。」と「演劇経験者の方が演劇無経験者よりも、自己肯定感が備わっているのではないだろうか」は成立しなかったと言える。しかし、演劇経験者の印象自体はコミュニケーション能力の面において良いといえるのに、演劇経験者のコミュニケーション能力の自己評価が低いという矛盾は大変興味深くさらなる研究が必要だと感じた。

また、演劇的要素についてであるが、人前で話すことが多い「責任職」に頻繁についてきた人や身体的言語でもある「身振り手振り」をして話をする人や「表情豊か」な人、人と関わる頻度が多い「年練関係なく遊びに行く」人や「仲介役」になることが多い人は、自身のコミュニケーションに対する意識が高い傾向があった。このことから、仮説の「演劇的要素は対人コミュニケーション能力の形成に関係している。」は成立したと言える。さらに、これらの人は自身のコミュニケーション能力に対する数値も高く、仮説の「自己肯定感が備わっている人ほどコミュニケーション能力が高い。」も成立した。

今後の課題としては、「質問項目の考え方を改めること」だと思った。今回回収したサンプルを分析して、役に立たない質問項目や分析の段階で思いついた質問項目が多々あった。例えば、「演劇を始めることはコミュニケーション能力向上に役立つと思いますか。」といった、それだけで分析ができる質問項目を増やすべきだと感じた。対比だけでなく、これからの演劇教育に役立つような学術的に誰の目から見ても一目瞭然な調査項目を考えていきたい。

参考文献

佐藤健二 (2012) 「ケータイ化する日本語」 大週刊書店

中村陽吉 (1989) 「心理学的 社会心理学」 光生館

「8年連続で新卒採用時に重視する要素、第一位に！企業が求める真の「コミュニケーション能力」とは」 (2011.10.4 ダイヤモンド)

<http://diamond.jp/articles/-/14267?page=2>

これからの企業・社会が求める人物像と大学への期待 (2015.4.2 経済同友会)

https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/pdf/150402a_02.pdf

「平田オリザ コミュニケーション能力を語る」 (2012.9.18 内田洋行教育総合研究所 学びの場.com)

<https://www.manabinoba.com/interview/18472.html>

「演劇はコミュニケーション教育に有効か？：コミュニケーションデザイン・センターにおける演劇教育」 (2010.3 平田オリザ)

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/3809/1/cdob_03_154.pdf

「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～話し合う・創る・表現するワークショップへの取り組み～」 (2011.8.29 コミュニケーション教育推進会議審議)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf

対人コミュニケーションに関する調査

情報学部メディア表現学科 3年 増広凌雅

担当教員：日吉昭彦

【ご記入に当たってのお願い】

1. 本調査は対人コミュニケーションについて調べることを目的としています。
2. 調査票には、必ず調査票を受け取ったご本人がご回答・ご記入ください。
3. 該当する質問には、全てお答えください。
4. アンケート結果は、表やグラフの形で数値として表現しますので、他の方が集計結果を見た時に特定の個人がどのような回答をしたのか分かることはありません。どうぞありのままお答えください。
5. お答えはそれぞれの問いの指示に従って、当てはまる番号に○をつけるか、文字や数字を記入してください。
6. 設問の内容など、不明な点がございましたら、調査担当者にお尋ねください

問1：あなたは演劇の経験者ですか。（どちらかに○）

※ミュージカル、声劇など「演じること」を経験している方も「はい」に○をつけてください。

※幼稚園や小学校のお遊戯会など、学校の授業のみ（ゼミは含めない）で経験した方は「いいえ」に○をつけてください。

1：はい (38.3%)	2：いいえ (61.7%)
--------------	---------------

※問1で「はい」と答えた方にお聞きします。

問2：あなたは演劇をどれぐらいやっている、またはやっていましたか。（1つに○）

1：半年以下 (33.3%)	2：半年～1年 (31.4%)	3：1年～2年 (2%)
4：2年～3年 (9.8%)	5：3年～4年 (7.8%)	5：それ以上 (15.7%)

問3：あなたは自分が演技をする上でどのジャンルの芝居が好きですか。（1つに○）

1：コメディ (49%)	2：シリアス (3.9%)
3：ファンタジー (25.5%)	4：ホラー (2%)
5：ブラックコメディ (7.8%)	6：青春もの (3.9%)
7：サスペンス(0%)	8：アクション (0%)
9：時代もの (5.9%)	10：その他 ()

→問8へ

※問1で「いいえ」と答えた方にお聞きします。

問4：あなたは演劇することに興味がありますか。（1つに○）

1：興味ある (12.3%)	2：少し興味ある (36.6%)
3：あまり興味がない (30.5%)	4：全く興味ない (20.7%)

問5：あなたは今までどのような部活動や習い事をしてきましたか。（自由回答）

※複数ある場合は今までで一番長くやっていたものを記述してください。

問6：あなたはこれまでに多くの人の前でのパフォーマンスや発表をしたことがありますか。あなた自身の感覚で構いません。（1つに○）

例) ライブ、ダンスの発表会、コンサート、メディアへの出演、総会の司会など

1：たくさんある (29.3%)	2：少しある (52.4%)
3：あまりない (11%)	4：全くない (7.3%)

問 7：人が人によって態度を変えることについてどう思いますか。(1つに○)

1：当然だと思う(20.8%)	2：仕方がない事だと思う(48.8%)	3：わからない(7.3%)
4：あまりいい気持ちがない(18.3%)	5：良くないことだと思う(4.9%)	

→問 8へ

※ここからは皆さんお答えください。

問 8：あなたの性別をお聞かせください。(どちらかに○)

1：男性(37.6%)	2：女性(62.4%)
-------------	-------------

問 9：あなたは普段の会話でリアクションが大きい方ですか。(1つに○)

1：大きい方と思う(17.3%)	2：どちらかと言えば大きい(36.8%)	3：どちらとも言えない(19.5%)
4：どちらかと言えば小さい(12.8%)	5：小さい方だと思う(10.5%)	6：リアクションはしない(3%)

問 10：あなたは人と身振り手振りを交えて会話しますか。(1つに○)

1：よくする(51.9%)	2：たまにする(36.8%)	3：どちらとも言えない(6%)
4：あまりしない(3.8%)	5：全くしない(1.5%)	

問 11：あなたはこれまで代表やまとめ役といった責任職に就いたことがありますか。(1つに○)

1：よく就いてきた(25.6%)	2：たまに就いてきた(48.9%)
3：あまり就いてこなかった(15.8%)	4：ほとんど就いてこなかった(9.8%)

問 12：あなたは友人関係の中で、仲裁役になることが多いですか。(1つに○)

1：よくなる(24.1%)	2：たまになる(53.4%)
3：あまりならない(14.3%)	4：ほとんどならない(8.3%)

問 13：あなたは年上・年下関係なく食事や外出をすることが多いですか。(1つに○)

1：よくする(48.9%)	2：たまにする(28.6%)
3：あまりしない(18%)	4：ほとんどしない(4.5%)

問 14：あなたは自分自身が表情豊かだと思いますか。(1つに○)

1：思う(34.6%)	2：少し思う(32.3%)
3：あまり思わない(24.8%)	4：思わない(8.3%)

→裏面へ

問 15：あなたから見た演劇経験者の印象・イメージをお聞かせください。(当てはまるものに○)

1：コミュニケーション能力が高い	33.8	28.6	22.6	8.3	6.0	低い
2：明るい	38.3	27.1	23.3	7.5	3.8	暗い
3：真面目	30.8	31.6	25.6	9.8	2.3	不真面目
4：独創的	38.3	38.3	38.3	38.3	38.3	普遍的
5：リーダーシップがある	15.8	15.8	15.8	15.8	15.8	ない
6：知的	15.8	15.8	15.8	15.8	15.8	知的でない
7：積極的	39.8	39.8	39.8	39.8	39.8	消極的

問 16：以下の項目であなたが最も当てはまる番号に○をつけてください。

	当てはまる			当てはまらない		
1：自分は人見知りだ	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	
2：人前での発表・スピーチが苦手だ	25.6	25.6	25.6	25.6	25.6	
3：自分の意見はあまり言わず我慢する方だ	15.8	15.8	15.8	15.8	15.8	
4：自分は緊張しやすいほうだ	34.6	34.6	34.6	34.6	34.6	
5：自分の人脈が広がることは魅力的だ	46.6	46.6	46.6	46.6	46.6	
6：自分は雑談が苦手だ	7.5	19.5	23.3	33.8	15.8	
7：自己PRは苦手だ	17.3	26.3	25.6	21.1	9.8	
8：自分は口下手だ	20.3	21.8	28.6	21.1	8.3	

問 17：以下の項目であなたが最も当てはまる番号に○をつけてください。

	当てはまる			当てはまらない		
1：友達が多い方だ	18.0	23.3	30.1	23.3	5.3	
2：友人と会話する時喋る方だ	29.3	39.1	16.5	12.8	2.3	
3：友人と会話する時冗談を言う方だ	30.1	36.1	24.1	6.8	3.0	
4：知人と会話が続かなくて気まずいことがある	6.0	30.1	27.8	24.1	12.0	
5：人と直接話をするよりLINEの方が楽だ	4.5	7.5	17.3	40.6	29.3	
6：友人から相談を受けることがある	25.5	41.4	18.8	9.0	5.3	
7：困っている友人を見ると放っておけない	23.3	45.1	19.5	8.3	3.8	
8：友人の友人と友達になることがある	32.3	30.8	17.3	16.5	3.0	

問 18：以下の項目であなたが最も当てはまる番号に○をつけてください。

(他人からの評価でも構いません)

	当てはまる			当てはまらない		
1：自分は声が通りやすい	27.1	26.3	12.0	24.1	10.5	
2：自分は人に指示伝達するのが得意だ	10.5	22.6	27.8	28.6	10.5	
3：自分は話を展開させるのが得意だ	7.5	27.8	33.1	24.8	6.8	
4：自分にはプレゼンテーション能力がある	8.3	15.0	28.6	33.8	14.3	
5：自分は周りをよく見ている	17.3	33.1	33.8	10.5	5.3	
6：自分は周りの空気を明るくすることができる	14.3	25.6	34.6	18.8	6.8	
7：自分は自分の意見がはっきり言える	21.1	27.1	26.3	19.5	6.0	
8：自分は人の話を聞くのが得意だ	25.6	40.6	20.3	9.0	4.5	

問 19：あなたが考える「コミュニケーション能力が高い人」とはどういう人を指しますか。

(それぞれ当てはまる数字に○)

	当てはまる	やや当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	当てはまらない
1:誰とでもすぐに仲良くなる人	60.2	29.3	5.3	3.0	2.3
2:人前に立っても物怖じしない人	39.1	28.6	21.1	9.0	2.3
3:話し方が上手な人	59.4	24.1	9.8	3.8	3.0
4:リーダーシップがある人	30.1	30.8	27.8	7.5	3.8
5:自分の意見をはっきり言える人	34.6	27.1	21.8	12.0	4.5
6:相手の話をよく聞ける人	61.7	20.3	13.5	2.3	2.3
7:何事にも積極的な人	44.4	24.8	19.5	9.0	2.3
8:空気が読める人	40.6	29.3	14.3	11.3	4.5
9:明るい人	48.1	24.8	23.3	2.3	1.5
10:真面目な人	21.1	19.5	36.8	17.3	5.3

問 20：上記以外にも何か思いつく方がいらっしゃればお答えください。

アンケートは以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。